巻頭特集

野木町地域おこし協力隊 加藤知子さん

大地の恵みで、元気いっぱい！ いきいき楽しむ 移住生活

人口減や高齢化などの課題を抱える地方への移住促進や地域活性を目指すため、総務省が行っている「地域おこし協力隊」制度。都市地域から転入した隊員は、転入先の地方自治体からの委嘱を受けて、農林水産業や環境保全、観光・教育などさまざまな地域協力活動に従事します。令和元年度の実績では、茨城・栃木ともに92名の隊員が活動。その中のひとりが、野木町で第1号の隊員となった加藤知子（かとう ともこ）さんです。まちの主要産業である農の分野で元気に活動する加藤さんの活躍をご紹介します。

自分の手で食べ物をつくる震災を教訓に農業の道へ

東京都出身の加藤さんが就農を志したきっかけは、2011年に起こった東日本大震災。「都市部の混乱ぶりを目の当たりにしたとき、食べ物を自分の手でつくっている人が一番すごいんだと痛感したんです。以前から農業に興味があったので、始めるなら今だと思って」と、当時を振り返ります。早速、千葉県いすみ市で有機栽培の研修に参加。2年ほど通いで農業を学んだのち、仕事を辞めてシェアハウスでの農業生活も経験し、着々と就農準備を進めていきました。

「多少経験したくらいでは、まだまだ素人です。もっと勉強したいと思う反面、今の生活のままではできることに限界がある。結婚を機に彼の地元の野木町へ移り住むことを決めたとき、野木町が地域おこし協力隊を募集していたことは本当に幸運でした」

縁とタイミングにも恵まれ、2017年、野木町へ移住して地域おこし協力隊の隊員第1号となった加藤さん。町の産業課の紹介で『農事組合法人ファームわか』にて実践的な農業研修を受けることから活動がスタートしました。

加藤さんが制作している「野木町地域おこし協力隊新聞」。
地域おこし協力隊の活動状況や町のイベント・特産品などを紹介しています

自慢できる作物がいっぱい野木町で学ぶ多様な農業

ファームわかは、地元農家が集まって組織した法人。現在10軒の所属農家は各自さまざまな農作物を生産しているほか、後継者不足などで耕作できなくなった土地を法人として管理するなど、協力し合って地域の農業を支えています。

加藤さんのやる気は当時の代表者にも伝わり、「とても親身に面倒をみてくださり、色々なことを教えていただきました」とのこと。たくさんの経験のなかでも、田植え作業はとくに印象に残っているそうです。「これまで米づくりは部分的に体験参加したことはありましたが、年間を通じて一連の作業を経験できたことはほんとうに勉強になりました」と、生き生きとした表情で話す加藤さん。農作業のほか、協力隊の本分である地域農業の活性化にも精力的に取り組み、冷めてもモチモチおいしいと評判のお米『ゆうだい21』や野木ブランドになっている『ひまわり油』の販促活動も行っています。

さらに、この先の目標でもある無農薬有機農業を学ぶため、じゃがいもや長ネギ、葉物野菜など多品目の露地野菜を生産している『コバちゃん農場』へ弟子入り。「お米から野菜まで、なんでもつくれる人になりたい」と、知識と技術の習得に余念がありません。

自然農業を発展させて安心安全な食を届けたい

「農業に打ち込む毎日は、とにかく楽しいです」と加藤さん。「からだを動かして、自分で食べ物をつくる。土に触れることで元気をもらい、どんどん健康になっている気がします」と、日に焼けた笑顔で農業の醍醐味を話します。この先の夢は、自分の畑を持ち、自然栽培での野菜づくりをすること。ファームわかのメンバーから農地を借りられる予定になっており、任期終了後に早速取り掛かれるよう、緑肥にするための麦を予定地に蒔いて準備をはじめています。

もうひとつの夢は、協力隊の活動で得た経験やたくさんの縁を、さらに広げていくこと。ひまわり油の加工製品の商品開発で6次産業化に取り組んだり、地産地消の農家レストランを開いたりと、やりたいことは尽きません。

土に触れ続けることで力を蓄えた両手は、加藤さんの誇り。「私のおばあちゃんが農業をやっていて、子どもの頃その手に憧れてたんです。大きくて、厚くて、かっこいいなぁって」。3年前に野木町へ来た頃より、確実に大きく力強くなったその手で。すっかり野木町の一員となった加藤さんが、まちの未来に豊かな実りをもたらしていきます。

色々な野菜に挑戦中です！

こちらは大根の種のサヤ。
この中に種が入っています

facebookでも活動をチェック！

野木町地域おこし協力隊
facebook アカウント
@nogi.chiikiokoshi

東京都板橋区出身。地域おこし協力隊の活動と同時に、一児のママとして子育てにも奮闘中。
お気に入りの場所は若の原農村公園！

文／伊藤梢　写真／Swallowtail　取材協力／コバちゃん農場